

河童かっぱの
せいやくしよ



登場人物

ナレーター

弥平やへい

河童かっぱの親分おやぶん

子河童こがっぱ

河童かっぱたち

馬方うまかたの仲間なかま 1

馬方うまかたの仲間なかま 2



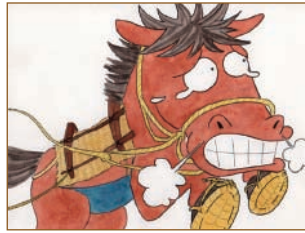
1



2



3



4



5



6



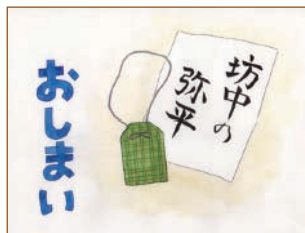
7



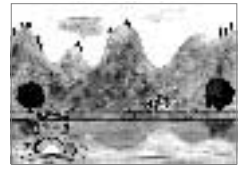
8



9



10



海老名耕地の中央にあった大きな沼は、古くから大釜と呼ばれていました。この周りは低地だったので、大水の時は街道もろとも沈んで、一面、湖のようになってしまいました。それでも、道沿いの並木を目標に歩く者がいて、踏みはずしておぼれたり、馬が落ちて死んだりすることもあって、『大釜の河童が引き込むのだ』と言われていました。

そのころ相模の馬方は、夜やさびしい山道では、馬の鞍の両側から、後ろに二本の長い縄をたらし、馬に引きずらせ、おおかみよけにしていました。

一方、鶴間原を通る馬方は、縄の先に五徳をゆわえて引っぱらせたので、これを『鶴間つ原の五徳ころがし』と呼んでいました。

おおかみには、この引き縄が蛇のように見えたのかもしれない。五徳のことを、蛇がくわえた三本足の怪物と思ったのかもしれない。

これを見たおおかみが、おそれて近づかなかったという事です。





弥平

弥平

弥平

子河童

さて、河原口かわらぐちの坊中ぼうちゆうというところに、弥平やへいという馬方がいました。

ある日の夕方ゆうがた、客きやくを鶴間つるままで送りおく、夜よになつて五徳いそころがしをしな
がら帰り道いそを急いでいました。

気がせいて五徳いそを引ひいていることも忘れわすれ、大釜おほくという大きな沼ぬまの近
くへ来ると、

「うわあ、どうしたんだ！」

何なににおどろいたのか、馬うまが急きゆうに走り出はしりました。

「こらあ、止とまらんかあ」

と叫さけびながら、一いっしょ緒しよに走はしつて家いへに帰かえると、引ひき繩しんの先さきに妙みような動物どうぶつが
しがみつみついていました。

「これは、なんじゃあ」

「ひえ、繩しんがからだに……」

見みると河童こどもの子供こどもで、引ひき繩しんの五徳いそを取とろうとしていいるうちに、繩しん
がからみつみついて、そのままま馬方うまかたの家いへまで引ひきずずられて来きてしままつた
ようようです。

今いままでも大釜おほくの河童こどもは、弥平やへいの馬小舎うまごやにししのびびこんで馬うまをおどろか



子河童

したり、縄や五徳をかくしたり、何度もいたずらをしていました。
こがっば
子河童は、

「もう、二度といたずらはいたしません。お許し下さい」
と泣いてあやまりましたが、

弥平

「もう、こんな事をせんように、ここに一晚いろ」

弥平はそう言つて、子河童を馬小屋の柱にしばりつけておきました。
すると、夜中に河童の親分が来て、

河童の親分

「これからは、私たちの仲間は弥平さんには絶対に手出しはいたしませんから、どうぞお許し下さい」とあやまりました。

弥平

「わかった。それでは誓約書を書け」

河童の親分

「河童は字が書けないので、手形だけ押します」

と河童の親分が言うので、

弥平が、『もうけっして、弥平どんに、いたずらはいたしません』

と書いて河童に手形をおさせ、子河童をにがしてやりました。

その後、日暮れに大釜の沼のそばを通ると、河童たちが頭を並べ



弥平

ていました。弥平が、

「坊中の弥平だ！」というと、

河童たちは、

河童たち

「へい、お通り下さい。気をつけてお帰んなさい」と言いったそうです。

馬方仲間1

いつの間にかこのことが、馬方仲間の評判ひょうばんになりました。

「おい、知つとるか？『坊中の弥平だ！』といって、この大釜おおがまのそばをとおると、これが河童かっぱよけの呪文じゅもんになるそうさ。

馬方仲間2

「おお、知つとるさあ。口の中で『坊中ぼうちゆうの弥平やへい』と言いってから、水みづの中なかに入はいれば、おぼれることはないそうさ。」
こうしてこのことは、村中むらぢゆうにも広ひろまりました。

のちに、『坊中の弥平』と書いた紙かみを、お守り袋まもぶくろに入れておいた人もいるそうです。

(注)

馬方うまかた…馬を引いて、客きやくや荷物にもつを運ぶはこことを仕事しごとにしている人。
五徳ごとく…炭火すみびなどの上に置き、鉄瓶てつびんなどをかける三脚さんきやく、または四脚よんの輪形りんけいの器具きぐ。鉄てつまたは陶器とうきせい製。